

論文

スティグマ化された家族の多様性の「発見」

—英語圏の発達心理分野におけるLesbian-family比較研究の検討—

有田 啓子*

はじめに

Lesbian-motherによる子育ては子どもの発達を阻害しないかをめぐって、欧米等では、発達心理学分野においてLesbian-familyとヘテロセクシュアル・ペアレントの家族との子育ての比較研究（以下、比較研究と略す）が行われてきた（有田2006-a）¹。比較研究の問題設定と結論について、Greenら（1986）は次のように説明している。

Lesbian-motherの子どもの「最善の利益」とはなにかが、（離婚に際して親権が争われる）裁判所で問題になってきた。裁判所は、ホモセクシュアルの母親と暮らす息子・娘の成長について、短期間の問題と、長期間にわたる問題に分けて関心を持っている。すなわち、前者は子どもに付与されるスティグマと、子どもの性的アイデンティティの混乱、後者は、子どもがホモセクシュアルになる可能性である。我々のデータは、Lesbian-motherの子どもも、シングルのヘテロセクシュアルの母親の子どもも、友だちからの受け入れや社会的適応性において、差異はないことを示している（Green et al. 1986:168より筆者が要約）。

Green以降も、サンプルの収集法や規模、統計手法等をより洗練させながら、こうした比較研究は続けられており、最近の大きかりな調査としては、Golombokら（2003）のものがある。ここでもGreen同様、Lesbian-motherはヘテロセクシュアルの母と比べて、特に子どもの発達を阻害するものではないという結論に至っている。これらの研究は、それまでタブー視され顧みられなかったLesbian-familyの子育てについて、発達心理学の側面から実証的なデータを提示し、Lesbian-motherの親権をめぐる議論にも寄与しえた点で意義があった²。しかし、近年報告されている、Lesbian-Gayの子育てに関する複数の分野の研究成果及びテキストは、これまでの比較研究が前提としてきた仮説の限界を、明らかにしつつある。本稿では、LGBT家族が多様な家族のひとつとして認知される社会の条件を探るために、代表的ないくつかの文献の検討を通して、従来の比較研究の問題点を検討したい。

なぜ、海外の研究を取り上げるのか。日本の研究において、シングル女性やLGBTの生殖に言及し、それを肯定的に捉える文献も少なくない。英語圏の著作の翻訳と前後して（Golombok et al. 1994=1997・Schaffer 1990=2001）、ここ数十年、生殖補助医療技術を論じる文脈で、シングル女性やLGBTにその技術の適用を阻むことへの疑問が提示されてきた（浅井1995・金城1998・齋藤2001・松原2003・家永2004）。社会学、とりわけ家族社会学の概説書・翻訳書においても、LGBT家族への言及が散見されるようになってきている（岩上2003・山根他2006・Cheal 2002=2006など）。また、釜野（2004）が当事者へのインタビューを、泪谷（2003）が当事者運動を紹介している。河口（2003）は、「かつてはクィアのあいだで家族問題といえば、家族へのカミングアウトを意味していたが、近年ではそうした出身家族の問題ではなく、自らが選択して形成する家族にシフトしてきている」（河口2003:122）としている。

一方、日本産婦人科学会は、1997年、「非配偶者間人工授精と精子提供に関する見解」を発表し、「被実施者は法的に婚姻している夫婦」とすることを明記している。すなわち、日本においては産婦人科学会に属する医師によって、非婚の女性が人工授精の施術を受けることができない。このことは実際上日本では、クリニックにおけるLesbianの人工生殖の道が閉ざされていることを意味する。上記の諸文献における、LGBTの生殖についての見解との乖離が見られるのである。それでは実際に日本におけるLGBT当事者の、生殖・子育ての現状、課題を伝える調

キーワード：セクシュアルマイノリティ、レズビアンマザー、ゲイファーザー、カミングアウト、LGBTIQの生殖

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2005年度入学 生命領域

査はあるだろうか。まだその蓄積はほとんどないと言っていいだろう³。一方欧米等においては、LGBTの生殖・子育てをめぐる調査・研究の蓄積は豊富にある。前述の通り、1970年代後半から今日に至るまで、Lesbian-motherの子育ては子どもの発達を阻害しないかを検討するために、発達心理学の立場から実証的に調査した研究の蓄積がある。それらの研究のほとんどは、ヘテロセクシュアルな母親による子育てと比較して、遜色があるか否かが調べられたものであった。現在もなお、議論は残るとはいえ、双方の子どもたちの心理学的発達についてはほぼ差異はないという結論に至る少なくない数の論文が著され、比較研究においては、決着がつきつつある(有田2006-a)。しかし、比較研究は、科学的実証性を標榜しながらヘテロセクシュアルを基準とするバイアスを相対化できていないという批判もある(Stacey & Biblarz 2001)。それらをふまえ、近年、Lesbian-familyそのものの多様性に着眼点があげられている。第1章において、Lesbian-motherのタイプ別分類と開示との関連に着目したVan DamとPerleszらの調査を、第2章において、LGBT家族の子どもの、スティグマとの主体的関わりを通しての自己評価の変化に着目したGershonらの調査と、Garnerの自伝を取り上げ、それらが比較研究のどのような限界を明らかにしているかを考察する。

なお、自伝を除き、取り上げた論文ではすべて、「性的アイデンティティを、自らの周囲の親しい人々、近隣、通学している学校、通院している医療機関の医療従事者、利用している福祉サービス提供者等に伝えること」を、“disclosure”(「開示」)という語で表し、公的な場で正式に表明するというニュアンスのある“come out”(「カムアウト」)と区別しているので、本稿もその用法に倣った⁴。

第1章 Lesbian-motherの多様性

1-1 Lesbian-motherの2タイプ分類—Van Damの「発見」

Van Dam (2001,2003,2004,2006a,2006b) は、アメリカのLesbian-familyを対象とした一連の調査を行っている。

Van Damの研究アプローチは、性的アイデンティティの開示問題に関する、先行研究を踏まえた次のような認識に依拠している。以下、Van Dam自身による先行研究の整理を参照する。

スティグマを付与された性的アイデンティティをあえて隠さずオープンにして生きることは本人に対して、高い自己評価をもたらし、悪意のある不意の暴露の不安を減少させる面があることが指摘されている(Morris 2001、Rosario 2001)。また、秘密を隠し立てせぬ生き方は、重要な他者からサポートを受けることを可能にし、パートナーなど親密な関係における大いなる満足をももたらすとされている(Jordan & Deluty 2000)。しかし、もちろん、開示は多大なリスクをもたらす。すなわち、Lesbian-familyをそのスティグマへの攻撃に晒すことになるのである。(Brown 1995)。さらに、Lesbian-motherは、二種類の脅威に常にさらされている。すなわち、自分の子どもが自分の性的アイデンティティが原因で、差別やいじめを受けることへの恐れ(Gibbs 1989)と、ひとたび子どもが問題行動を起こしたときに、それが自分の性的アイデンティティが原因であると見なされる不安である(Lynch & Murry 2000)。そこで一部のLesbian-motherは、非開示の戦略をとって、攻撃回避行動を取るようになる。しかし、レズビアニズムを開示しないというのは、サポートイブな環境を構築したり、出身家族、友人、同僚、コミュニティへのアクセシビリティを疎外する(Jordan & Deluty 1998)。それだけでなく、日々の暮らしのなかで、複雑な外観を維持しなければならないストレス(Ainslie & Feltey 1991)、子どもにうそをつくことを教えねばならないストレス(Wright 1998)、要するに、開示か非開示かの狭間で、絶え間ない決断のエネルギーが要求されるのである(DiPlacido 1998)⁵。

以上の先行研究をふまえ、Van Damは、性的アイデンティティの開示をめぐり、臨床看護の立場から、アメリカのLesbianを対象にして、一連の調査を行った。

Van Dam (2001) は、ヘテロ・セクシュアル女性と、Lesbianとを比較し、医療機関に関わるときに、性にまつわる個人情報に関して異なる経験をしているかどうかについて、アメリカの33のヘルス・クリニックのクライアント1161人を対象に調査した(内、524人がLesbian、637人がヘテロ・セクシュアル女性)。結果は以下の通りであった。すなわち、「過去12ヶ月の間で、性的アイデンティティが理由で、医療機関にアクセスすることが遅れたことはありますか」との質問に対して、「はい」と答えたのは、Lesbianは190人(36.8%)、ヘテロセクシュアル女性は16人

(2.7%)、「いいえ」と答えたのは、Lesbian326人(63.2%)、ヘテロセクシュアル女性568人(97.3%)、「医療機関へのアクセスが遅れた理由として、その原因のうち、性的アイデンティティに対する差別への恐れはどのくらいを占めますか」に対して、「全くない(または、ときどき)」と答えたのは、Lesbian87人(69.6%)、ヘテロセクシュアル女性108人(99.1%)、「つねにそうである(または、ほとんどそうである)」と答えたのは、Lesbian38人(30.4%)、ヘテロセクシュアル女性1人(0.9%)だった(Van Dam 2001:15 Table IIより筆者が要約)。

Van Damは、以上の調査で、ヘテロセクシュアル女性とLesbianとでは、あきらかに医療機関へのアクセス行動に有意な差があることがわかったとした。性にまつわる事柄は個人情報であり、例え医療者に対してでも、不必要に開示を求められることはない。しかし、LGBTにとって、医療を受ける際に、自らの性的アイデンティティ、家族スタイルについての情報を医師に伝えることが、重要となる場合がある。なぜなら、そのようなアイデンティティやライフスタイルを持たなければ直面することのないさまざまな葛藤を抱えている可能性が高く、時にはそれらが治療計画の背景情報として役に立つことがあるからである⁶。

必要な場面で重要な個人情報を開示することは、心身ともに健全に暮らす際の必要条件である。しかし、少なくとも、ヘテロセクシュアル女性とLesbianとを比較する限り、両者の間に、性的アイデンティティをめぐる、医療サービス提供者からの反応について抱く恐れに関して、はっきりとした差異があり、そのことのために受診行動に影響があることが、明らかになった。このことは従来から当事者は知悉していたが、統計的に実証したのはこの調査がはじめてであるとVan Damは述べる。

以上のような問題提起の後、Van Dam(2004)は、360人のLesbian-mother(180組のカップル)を対象に、質問紙法を使って、家族タイプによって、自らの性的指向をめぐる母親としての経験に差異があるかを調べた。すなわち、Lesbianとしてのアイデンティティを持った後に子どもを得たLesbian-mother(以下、これをタイプ①とする。120家族)と、子どもを得た後にLesbianアイデンティティを持ったLesbian-mother(以下、タイプ②。60家族。例えば以前婚姻していたが離婚後Lesbian-familyを形成したケース)とを、比較した。両者の共通点は、住んでいる州、地域においてLesbian-motherへの差別の存在を感じる点⁷、子どもたちが、親の性的アイデンティティのために学校や近隣においていじめやハラスメントを受けないかという不安を持っている点、子育てに子どもをよく知る男性(祖父、元配偶者、友人など)が関わることを歓迎している点であった。

一方、Van Damは、家族外部への開示、外部から受けるサポートに関して、タイプ①とタイプ②ではあきらかな違いがあることを見いだした。タイプ①のほうが、タイプ②よりも、家族の外部からのサポートを明らかに多く受けていたのである。具体的には、親・兄弟が、自分たちを受容しているか、近隣が自分たちに対して寛容かの問いに対して、タイプ①のほうが、より肯定的に答えている。医療サービス提供者に対しても、タイプ①のほうがよく開示している。さらに、ヘテロセクシュアルの友人が「かなりたくさんいる」と答えたのは、タイプ①は88人(73.9%)であったのに対し、タイプ②は32人(55.7%)、また、LesbianやGayの友人については、タイプ①は102人(85.7%)、タイプ②は、36人(59.0%)と、明らかな違いが見られた(Van Dam 2004:462-463 Table III)⁸。Van Damは、まずLesbianが、ヘルスケア提供者の無理解や消極的反応を恐れて受診を躊躇する実態を明らかにした上で、Lesbian-familyも、家族スタイルのタイプにより周囲への開示の程度や、周囲から受けるサポート・友人の多さに違いがあることを示したのだった。

ここで、冒頭に述べた本稿の課題、すなわち従来の発達心理学分野における比較研究の仮説の検討という観点で、Van Damの研究について論じたい。比較研究は、Lesbian-familyを均質な集団として扱った上で、ヘテロセクシュアルの母親の子育てと比較してきた。「Lesbian-motherの子育ては健全か」との問いに対して、比較研究は応答したわけだが、そもそもこの問い自体の問題性を問うことはなかった⁹。Stacey & Biblarzはその点を批判したのだが、Van Damは、これまで十分に着目されてこなかったLesbian-family自体の多様性を示すことにより、Lesbian-familyを均質な集団として扱った上で、ヘテロセクシュアルの親の家族と比較すること自体の限界を明らかにした。ただし、比較研究が無意味であると考えているわけではない。比較研究による豊富な実証データは親権紛争の場面など、有用な局面があったのも事実なのである(有田2006-b)。

ところで、Van Damは、Lesbian-familyをさらにサブカテゴリーに分類したが、それらの家族を均質化した誹りを免れない。Van Damにもそのような限界があることのみ、ここでは指摘しておきたい。

Van Damは、Lesbian-motherには2タイプがあり、それぞれで開示のレベルが全く異なる実態を「見いだした」。その研究をふまえて、Perleszらは、開示の違いは、多い少ないの違いだけなのかどうか、さらに詳細に調べて、「4タイプの開示」があることを見いだす。次節では、そのようなPerleszらの研究を通して、冒頭に述べた課題、すなわち比較研究の限界について再度検討したい。

1-2 4つの開示戦略—Perleszらの「発見」

Van Damの諸論考をふまえて、Perleszら(2006)は、Lesbian-familyの家族構造に着目するだけでなく、家族構造と開示との関連にも注意を払った。Perleszらは、オーストラリア、ヴィクトリア州の25のLesbian-familyと、その周辺のメンバー、すなわち母親、その子ども、精子ドナー、祖父母を対象に、調査を実施した¹⁰。調査の方法は、質的調査で、グランデッド・セオリーを用い、スノーボールメソッドによりサンプルを収集し、1.5～5時間にわたるインタビューを行ったものである。25家族の内訳として、10家族は、Lesbianのカップルである二人が、子どもを得て育てている家族で、Perleszらはこれを、“De novo”(「デノボ家族」)と呼んだ¹¹。11家族は、以前の異性との関係により得た子どもを育てている家族で、これについては「ステップファミリー」と呼んでいる。前者は、Van Damにおけるタイプ①、後者はタイプ②にあたる。4家族はパートナーのいないLesbian-motherとその子どもの家族である。

この25家族から、合計で45人の親(29-64才)、22人の子ども(4-34才)、4人の祖母(全員、生物学的祖母)、2人の精子ドナーが参加した。リサーチ・クエスチョンは次のものである。「いかにして、Lesbian-familyは、私的な世界と、公的な世界との連絡・橋渡しに取り組んでいるか」、「医療、教育、法律、福祉制度にアクセスするとき、どのような経験をするか」である。

このインタビュー調査で、Perleszらは、Lesbian-familyが開示か非開示かの二者択一ではなく、もう少し複雑な方法を用いていることを見だし、開示方法の選択を外界に対する家族戦略ととらえ、4種類に分けた。すなわち、プライド戦略、プライベート戦略、受動的戦略、選択的戦略である。

プライド戦略とは、可能な限りどのような場面においても開示することに徹するという戦略である。その理由は、正直でありたい、混乱を避けたい、子どもに対して親として適切な行動モデルを示したい、非生物学的母親を社会に認知させたい、というものである。この戦略を主に用いたのは、「デノボ家族」の構成員であった。一方、プライベート戦略とは、基本的に開示しないことに徹するという戦略である。理由は、社会と交わりを持つのに、性的アイデンティティは関係ない、医療従事者等には開示する方が望ましい場合もあるが、しかし医療従事者等とは長期的に関係を持ち続けるわけではないからむしろ、社会の攻撃から子どもを守るために隠す、というものである。この戦略を主に用いたのは、「ステップファミリー」の構成員であった。一方、プライド戦略とも、プライベート戦略とも異なり、尋ねられれば答えるがそうでなければこちらからあえて開示しない、という受動的戦略を採る家族もあった。この戦略は特に、病院で採られていた。また、ある場面・人物には開示するが他の場面・人物には開示しない、というように、場面や人物によって異なった開示をする選択的戦略を採る家族もあった。この戦略は、特に学校で採られていた。

また、Perleszらは、家族のメンバー全員が同じ戦略を用いるわけではないとした上で、つぎの発見を記している。「ステップファミリー」の子どもと、「デノボ家族」の子どもとは、家族定義や開示において、明らかな違いがあるということである。「ステップファミリー」のなかで生きる子どもの経験と、「デノボ家族」の中で暮らす子どもの経験とを、はっきりと区別をつけることは、ほとんどの論文では無視されているが実際には明らかな違いがあることが、Lesbian-familyの経験の重要な特徴であると、Perleszらは指摘する。具体例として、ウェンディ(13才)の例が挙げられている。Perleszらの調査のなかでも例外的ではあるが、彼女は祖母・母とも、Lesbian-motherである。彼女は、自らの家族を、「ノーマル」な家族と呼び、学校の友達たちに自分の家族のことを一切隠すことはないという¹²。

ウェンディの例が、「デノボ家族」の子どもたちのほうが、「ステップファミリー」の子どもたちに比べて、よりポジティブな経験をしているように見えても、すべての「デノボ家族」の子どもたちが同様の経験を

していると考えることには慎重であるべきだろう。(中略)しかし、我々は当面、「デノボ家族」において育てられた子どもたちの方が、彼らの親のレズビアニズムを開示することにおいて、「ステップファミリー」の子どもたちよりも、より満足を感じているであろうと考えることはできるだろう。なぜなら、彼らはLesbian-motherと、すべての人生を送ってきているのであり、彼らにとってそれが「ノーマル」なのだから (Perlesz2006:61-62)。

現代のLesbian-familyが日々、どのような経験をしているかを理解するには、彼女ら／彼らが、自分の家族をどのように定義し、家族構造をどのように開示しているかを問うことが重要であると考えたPerleszらは、以上の調査から次の結論を導いている。「デノボ家族」と、「ステップファミリー」では、子どもたちの経験の内容において、顕著な差異が存在すること、家族メンバーたちは、開示において、さまざまな戦略を採用していること、自分たちの家族の「真正さ」(オリジナルな存在であること)と、同時に、安全性(外部からの否定的な反応から自らを守ること)との間での絶妙なバランスをとっていることを見いだした。

Perleszらは、Lesbian-familyのメンバーたちは、家族のタイプによっても特徴があるが、家族タイプに関わらずさまざまな開示戦略をとりながら、「私的な世界と、公的な世界との連絡・橋渡しに取り組んでいる」ことを見いだした。従って、Lesbian-familyが公的な世界に見せる「顔」はさまざまであることが予想される。この「発見」を、本論の主旨に沿って言い換えれば、発達心理学分野のLesbian-mother比較研究は、Lesbian-motherの子育てが子どもの発達を阻害するか、との問いに取り組んできたことは何度も繰り返してきたが、その際、ヘテロセクシュアルの親の子育てと比較するために、Lesbian-motherとその子どもを均質な集団として一括りにできるという前提に依っていた。この前提の限界を、Perleszらの「発見」も、改めて明らかにしたと言えるだろう。

第2章 Lesbian-motherの子どもの多様性

2-1 スティグマに立ち向かう子ども—Gershonらの「発見」

Gershonら(1999)は研究の目的、先行研究について次のように述べる。800万から1000万人いるとも言われるLesbian・Gay家族において育てられている子どもたちについて、その心理学的成長が問われ、多くの研究がなされた。しかしながら、社会が子どもたちに付与するスティグマによる、子どもたちへの心理学的な影響はいかなるものかについての調査はほとんど行われておらず、自分たちの研究がほぼ初めてのものだという。この社会では、Lesbian・Gayはスティグマ化されている。そこで当然、レズビアニズムに対する社会からの反応によって、子どもたちはなんらかの影響を受けるだろう。しかし注意しなければならないことは、社会的要因による影響と、母親個人のレズビアニズムによる影響とを混同してはならないということである。従来のLesbian-family研究は、心理学的基準で測定して、Lesbian-familyの子どもと、ヘテロセクシュアルの親の子どもを比較してきた。しかし、母親個人とは関係のない、社会の態度による、子どもへの心理学的影響は検討されてこなかったというのである。

スティグマが子どもの心理学的安寧に与える影響についての先行研究を、Gershonらは次のように整理している。人種的偏見に関するパイオニア的研究と言われる、Clark(1955)は、子どもたちは、自分が属する集団に対するスティグマを内面化しやすく、その結果、自己評価の低下に苦しむと指摘した。Goffman(1963)は、スティグマへの対処法として、スティグマ化された特徴を隠したり、交際を制限する対処法をあげ、それらの対処法は、ともすれば本人に疎外感を味わわせ、サポートから遠ざけてしまいがちであることを指摘した。Westbrook(1992)は、てんかんの青年は、スティグマを感じている青年のほうが、スティグマを感じていない青年よりも、自己評価が低いことを指摘した。また、Lewis(1980)は、21人のLesbian-motherの子どもについての質的調査を行い、母親のことを学校や友だちに対して秘密にしている子どもたちは、友だちを遠ざける結果になっていることを見いだしている。これらの先行研究からGershonらは、スティグマと開示と自己評価には関係がある可能性が高いとし、Lesbian-motherの子どもについて統計的手法を用いて検証することにした。

Gershonらの調査は次のようなものであった。

調査対象は、サンフランシスコ湾岸地方に住む、Lesbian-familyの子ども、76人で、年齢は11-18才であった。全

員が、自分の母親がLesbianであることを知っている。測定方法は、自己評価、感知されたスティグマ、対処する能力、開示の程度について、それぞれの測定尺度を用いて行い、相関が調べられた¹³。

Gershonらは、仮説として、次の3つをたてた。

仮説1. スティグマを強く感知するほど、自己評価は低くなる。

仮説2. スティグマを強く感知しても、対処能力の高い子どもたちの場合は、自己評価は低くない。

仮説3. スティグマを強く感知しても、母親のレズビアニズムを開示している子どもは、自己評価は低くない。

Gershonらの調査により、仮説1、すなわち、スティグマと自己評価との関連性は予想どおり、強力に証拠づけられた。仮説2、すなわち、スティグマを強く感知した子どもたちの自己評価への影響を緩和するものとして、対処能力は強力に作用することも実証された。仮説3については、母親のレズビアニズムをより開示している子どもは、親しい友人関係においては、より高い自己評価を得ている。開示は、自分のスティグマ化された特徴について語ることであるから、拒絶される恐怖や不安とともに行われることがしばしばである。強くスティグマを感じるにも関わらず開示をした子どもは、開示していない者よりも、親しい友人関係を形成する能力に関して、より高い自己評価を持つ。その意味では仮説3も支持されたことになる。ただし、Gershonらは親密な友情を形成する能力に関する自己評価が高いときに、開示するのか、逆に、開示することが高い自己評価を導くのか、いずれが当てはまるのかはわからなかったとしている。以上がGershonらの提起である。

保留付きであれ、Gershonの調査により、開示と自己評価には関連があること、さらには、スティグマ克服の手段としても、開示は無関係ではないことが示された。第1章で見たLesbian-familyのタイプをあてはめれば、「ステップファミリー」の子どもたちは、開示の程度が低く、自己評価も低いと予想されるのだろうか。これに対して、Gershonらの調査が示唆することは、その子どもが持つ問題対処能力の高低によっても、スティグマによる痛手の程度は多様であること、さらには、開示を通してスティグマを乗り越え、親密な友人関係を得ることができたとき、子どもはむしろ、より大きな満足を得るかもしれないということである。

ここに至り、従来の比較研究の仮説の前提について、さらに論じることができる。Gershonらの研究は、Lesbian-familyの家族タイプに関わりなく、子ども自身の「開示」行動が自己評価に変化をもたらしていることを見いだした。Lesbian-motherの子どもはハラスメントを受けるのではないかと危惧に対し、従来の比較研究は、子どもの心理学的安寧を測定、比較することにより応答した。しかし、Gershonらの研究は、ハラスメントの有無に関わらず、子どもの主体的行動が心理的様態を変容させようことを示している。測定された心理学的安寧が例え近似値を示しても、その経験の内容は多様である。それらを不問に付すことは現実とかけ離れている。それにも関わらず、それらが捨象された数値の比較に、どの程度の意味があるのだろうか。数値による比較作業の背後には、作業仮説があるはずである。第3章でそのことを指摘したいと考えるが、その前に、次節でGay-fatherに育てられた子どもの生い立ちの記録を取り上げたい。Gayの父親に育てられることを通して内面化するに至ったセクシュアル・マイノリティの視点と、社会の異性愛規範とのジレンマに苦しんだ女性が、いかに自分自身の「Queer性」に気づき、それを受容していったかについて自ら語った記録である。その半生記を検討することを通して、再び比較研究の限界を明らかにする作業を行うことにする。

2-2 Queer性を主体化する子ども—Garnerの「自己発見」

Garner (2004) は、5才のときに両親が離婚、その後Gayの父親とそのパートナーとに育てられた、上記の研究でいうところの、Gayの「ステップファミリー」の娘である。

彼女は、自らの経験を記した半生記を著している。以下は、第8章「家のなかの旅人：クィア・カルチャーにおけるストレートの子どもたち」の冒頭の一節である。

フェミニストブックストアで本を見ていたとき、私は、数年前に会った少年の母親に出会った。知り合いに、そのストアで会うというのはめずらしいことではない。なぜなら、このストアは、事実上、Queerのコミュニティセンターの役割を果たしていたから。私は、この母親に、一年以上会っていないその少年のことを尋ねた。私が知っていた頃の彼は、自分の母親がレズビアンであることを悩み、隠していた。彼女

は、私に彼女の息子のことを次のように話してくれた。彼は、第5、第6学年のときは、人々が自分の親がLesbianであることを知ったらどうしようと悩んでいたが、同じような家族の子どもたちに会ったとき、彼はよりオープンになりはじめた。第7学年の今は、学校の、Gay-ストレート連合組織（GSA）の、リーダーのひとりになっているとのことだった（Garner2004:193）。

この母親とのやりとりのなかで、Garnerは、その息子の将来を案じている。すなわち、いまは12才の少年であっても、やがてヘテロセクシュアルの男性に成長したとき、いつまでも、クィア・コミュニティが、彼を暖かく迎え入れ続けるかについては疑問であることを、彼女自身、体験から学んでいるのである。「圧倒的にQueerな環境で育ったストレートの息子や娘たちは、どうやって、圧倒的にストレートな環境に、成長してから、適応したらいいのだろうか？ ストレートの子どもたちは、どうやって、自分自身のセクシュアリティを恥じることなく、自分の家族を誇りに思ったらいいのか？（Garner2004:194）」、この問いは、思春期を通じて彼女を苦悩させたのである。

Garnerは、50人を超えるLGBTの子どもたちへのインタビューをするとともに、自らGayに育てられた体験を、印象的に描出している¹⁴。

大学入学とともに、親元から離れて暮らし始めたとき、自分がヘテロセクシュアルであることに気づき始め、親たちが属し、また自身も属していると信じていたゲイ・コミュニティにはもはや属することができないもどかしさ・理不尽さと、かといって、ゲイを忌み嫌い、あるいは嫌わないまでもゲイの暮らしや思想についての理解の浅い人々とはやはり自分は違うという、ジレンマに苦しむ。しかし、文化人類学等を読み、「文化」概念について深く内省することを通して、「Gay」とは、ある種の「文化」であることを見いだす。

「Gayである」とは、アイデンティティであり人生でありそして文化である。たしかに、彼・彼女らが自らを、Gay・Lesbianであるとアイデンティファイさせるものは、セクシュアリティに違いない。しかし、LGBTのコミュニティを作っている共通の基盤は、単なるセクシュアリティではなく、オルタナティブな文化への熱烈な希求である。歴史的に抑圧され、追放され、無視されてきた人々の一員であることの結果、支配的な文化に対するオルタナティブな文化を求めずにはおれず参集してきているのである。Gay家族の子どもとして、私は、ある感覚を養ってきた。それは、“gaydar”と言われるもので、遠くからでもGayを見分けられる能力が身に付いている。また、私は、Gayのコーラスを好んで聴く。それは私の精神を高揚させる。Gayの新聞を読むし、ホモフォビアに対抗して生きるために、日々戦略をたてている。このような文化にアイデンティファイすることが、私に所属の感覚を与えてくれた。酸素のように、私はそれに気づかなかった。やがて、家を離れ、Gay文化に容易にアクセスできなくなったとき、初めて、気づいたのだ。私はそれなしでは人生を生きられないことに（Garner2004:195-198を抄訳）。

26才の時に彼女は、LGBTの子どもたちの組織COLAGE¹⁵の仲間から、“culturally queer, but erotically straight”「文化としてはクィア、性的ファンタジーはストレート」という言葉を聞く。これこそ彼女自身をまさに言い表したものであり、それ以後、彼女は自身を、“bi-cultural queer”「二つの文化を持つクィア」と称して、「クィア・カルチャー」の理解を求めて活動を始め、現在に至っているのである。

「異性愛社会にあってはひとはそうではないと証明されるまで全員が異性愛者である」（ヴィンセント1997:93）とされるが、Lesbian・Gayの家族において育てられた子どもたちは、奇妙な位置に立たされる様子を、Garnerはみごとに描いている。すなわち、性的アイデンティティとしては異性愛者だが、自ら内面化している「文化」は、まさにQueerであるというのである。このとき、いったい、Lesbian・Gayの家族の子どもたちにとって、「開示」することとは何を意味するのだろうか。彼女の造語の「バイカルチュラルQueer」というのはまだ耳慣れないし実態がないということも否定できまい。実際、彼女が友人に自らのQueer性についての理解を求めて、「開示」したところ、友人の無理解に直面する。すなわち、「お父さんはGayでも、あなたは異性愛者でよかったじゃない」という反応があったという。そもそも、Garnerが、「大学構内で会った知人に、走って行ってつかまえて“カミングアウト”するのも変だと思い、止めた」ように、「開示」をする場面がないのである。このように、Lesbian・Gay家族の子どもたちが苦しむのは、自らの性的指向のためでも、単に親がセクシュアルマイノリティであるからだけではない。自ら内面化している文化がQueerであるからだということに、Garnerは思い至ったのだった。

Garnerの半生記は、特色ある父親に育てられた子どもの非凡な体験談に留まらぬ、セクシュアリティをめぐる深

い思索の跡を示している。Garnerは社会からのスティグマによって受動的にのみ苦しんだのではない。彼女は、社会からのスティグマよりむしろ、自分も属していると信じていたGayコミュニティにもはや属することのできない疎外感、セクシュアルマイノリティに対して無理解な側に立たされる理不尽さを苦しみ、その中から、自らの行動の指針を見いだすのである。このGarnerの半生記も、2-1のGershonらの調査と同様、従来の比較研究の限界について明らかにする。Garnerは、心理学的尺度では測定できぬ体験を記している。測定できない体験はカウントせず、性的指向のみを取り出して、二集団をそれぞれが均質なものとして比較できると前提してはじめて、Lesbian・Gayの子育ては子どもの発達を阻害するかという問いは「反証」できる。しかしこの前提自体に限界があるということ、Garnerのテキストも明らかにしているのである。

第3章 Lesbian-family比較研究の限界

日本のLGBT研究において、開示をめぐるのは、むしろ、「政治的な意味での開示」としてのカミングアウトが重要なテーマの一つとなってきた。ヴィンセント（1997）の指摘のとおり、この社会にあって、ひとはそうではないと証明されるまでは異性愛者である。異性愛者は、「異性愛」実践のうち、夫や妻の日常生活については、秘匿すべきプライベートなものではなく公然と口にされるが、性的な部分は防衛的なプライバシーのうちに含まれていることが多い。ところが、同性愛者の「同性愛」実践は、すべてが「性生活」と同一視されがちであり、そのために、同性愛者のアイデンティティ全体が、覆い隠すべきものとみなされてしまう。そこで、Lesbian・Gayのカミングアウトは、しばしば、「なぜそのようなプライベートなことがらを、聴かされなければならないのか」と敬遠されることになる。必然的にカミングアウトは、異性愛者と同性愛者とのプライバシーの異質性を標榜しつつ、なされざるを得ず、政治的な色彩を帯びざるを得ない。

堀江（2005）は、Lesbian・Gayのカミングアウトを次のように論じている。

カミングアウトとは、異性愛が「前提」とされる社会にもたらすインパクトと、同性愛者の可視性を創出する行為としての、政治戦略の実践である。その政治戦略としての実践は、異性愛主義のなかで、①異質性を表明することにより、異性愛主義の持つ規範自体を自明のものではないとして問題化すること、また②同じように異質性をもつ同性愛者が分断されている状況を問題化し、つながりを持つ可能性を提示する、という意味において機能する。（中略）カミングアウトとは、同性愛者として烙印を押された状態から、その烙印を引き剥がして「解放」に向かうプロセスを指すのではない。むしろ、セクシュアリティを語ることに、主導権を回復しようとする手段を通して行使される、＜抵抗の行為＞として位置づけられるものである（堀江2005:153-155）。

また、河口（1999）は、ゲイのカミングアウトを、「ホモソーシャルな特権的世界から撤退する実践を意味」し、「異性愛男性として享受できる特権を放棄すること」であると述べている。

しかし、個人の、性を含むプライバシーや、家族がどのようなメンバーから構成され、どのような関係性によって築かれているか、という情報は、その情報が必要な場面（医療や福祉、教育等）では、「抵抗の行為」や、「特権の放棄」のように、政治的にのみ、なされるものではないはずである。開示は、その個人の利益になるからこそなされるというものであるべきであり、開示したために、不利益を被ってはならないはずなのである。ところが、例え「情報の秘匿」が守られるとされようとも、医療その他のシステムの担い手の、ホモフォビアや無理解を恐れて、Lesbian・Gayは、その開示そのものすら、ためらうという可能性がある。Van Damの指摘の通り、当事者は従来からその事実を体験的に知っていたが、日本ではこの問題についての調査は、日高（2004）など、まだ緒に就いたばかりである。

本稿は豊富な蓄積を持つ、発達心理学分野における比較研究の仮説を検討するという課題を立てて、複数の論文、自伝の検討をしてきた。それらが、従来の比較研究が前提としてきたことの限界を、別の角度から明らかにしていることを指摘した。2点に整理したい。

第1に、Van DamやPerleszらの研究を通して、比較研究はLesbian-familyや、その子どもを均質化して扱うことができるという前提を立てていたという限界が示唆された。第2に、Gershonらの研究や、Garnerのテキストを通して、比較研究はLesbian-familyの子どもが、ステイグマに対して主体的に行動しうる子どもの個性を捨象して、Lesbian-familyの子どもを均質化できるという前提を立てていたという限界が示唆された。先述したが、あらためて、以上の比較研究の限界は、そもそも比較研究が「反証」した問い自体の限界であったことを指摘したい。比較研究は、「Lesbian-motherの子育ては子どもの発達を阻害するか」という問いを検証してきた。しかし、この問いは、そもそも「親の性的指向は子どもの発達に有意差をもたらす要因になる」か否かは不問に付した上で、Lesbian・Gayのみを問題視するという前提に立っている。比較研究はこの前提自体の問題性を問うことなく、ヘテロセクシュアルの親とLesbian・Gayの子育てとを比較しようとしたために、両者の集団内の多様性は捨象せざるを得なかったのである。

一方、比較研究は、Lesbian・Gayの子育てを問題視する攻撃に、限定的に応答しようとしたものでもある。その限りでは、繰り返しになるが比較研究は有用な局面もありうることを否定することはできないだろう。本論が指摘したいのは、その両面をふまえることを忘れてはならないという点である。

おわりに

すべての家族は（虐待等の問題をはらまぬ限り）同等に尊重されるべきであるとの思潮を画餅にしてはならない。家族の多様性の受容を実現することが、具体的にはどのように困難であるのか、その一例を身をもって、LGBT家族は示している。欧米等の発達心理学分野における比較研究を行う研究者も、基本的には、LGBT家族が多様な家族の一員として社会から認知されるべきことを唱えている。比較研究の限界を指摘してきたが、それを実施してきた研究者らのめざす方向に異論はない。本論はLesbian-motherとその子どもたちの多様性を概観してきた。Lesbian-familyが多様であることは、ヘテロセクシュアルをはじめとして、その他のありとあらゆる家族が多様であるということと変わりはないだろう。しかし、多様であることを理解することが、ステイグマを付与された家族を理解するとき特に重要な作業のひとつとなることはもはや言うまでもないだろう。

【参考文献】

- Ainslie,J., & Feltey,K. (1991). "Definitions and dynamics of motherhood and family in lesbian communities," *Marriage and Family Review*,17 (1/2) :63-85.
- 有田啓子 (2006-a). 「Lesbian-motherの子育ては健全か—発達心理学分野の実証研究とそれをめぐる議論—」, 『Core Ethics』 2:209-224.
- 有田啓子 (2006-b). 「迫られる「親」の再定義—法的認知を求めるアメリカのlesbian-motherが示唆するもの—」, 『Core Ethics』 2:17-30.
- 有田啓子・藤井ひろみ・堀江有里 (2006). 「交渉・矛盾・共存するニーズ—同性間パートナーシップの法的保障に関する当事者ニーズ調査から—」, 『女性学年報』 27:4-28.
- 浅井美智子 (1995). 「生殖技術により家族の選択は可能か」,浅井美智子・柘植あづみ編『つくられる生殖神話—生殖技術・家族・生命』,サイエンスハウス.
- Brown,L,S. (1995). "Lesbian identities: Concepts and issues," in A.R.D'Augelli & C.J.Patterson eds., *Lesbian, gay, and bisexual identities over the lifespan: Psychological perspectives* ,Oxford University Press.
- Brown,R.,McNair,R.,& Perlesz,A. (2006). "Public Authenticity vs. Safety—Australian Lesbian-parented families experience of disclosure in public contexts," at the workshop in the international conference of 1st OUT GAME in Montreal.
- Cheal,D. (2002). *Sociology of Family Life*, Palgrave Macmillan, (野々山久也監訳,2006. 『家族ライフスタイルの社会学』,ミネルヴァ書房.)
- Clark,K.B. (1995/1970). *Prejudice and your child*, 2nd ed., Beacon.
- DiPlacido,J. (1998). "Minority stress among lesbians, gay men, and bisexuals: A consequence of heterosexism,

- homophobia, and stigmatization,” in Herek, G. ed., *Stigma and Sexual Orientation*, Sage.
- Garner, A. (2004). *Family Like Mine: Children of Gay Parents Tell It Like It Is*, Harper Collins Publisher.
- Gershon, T., Tschann, J., & Jemerin, J. (1999). “Stigmatization, self-esteem, and coping among the adolescent children of lesbian mothers,” *Journal of Adolescent Health*, 24:437-445.
- Gibbs, E. (1989). “Psychosocial development of children raised by lesbian mothers: A review of research,” *Women and Therapy*, 8:55-75.
- Goffman, E. (1963). *Notes on the management of spoiled identity*, Prentice Hall.
- Golombok, S., Perry, B., Burston, A., Golding, J., Murray, C., Mooney-Somers, J., & Madeleine, S. (2003). “Children With Lesbian Parents: A Community Study,” *Developmental Psychology*, 39 (1) :20-33.
- Golombok, S., & Fivush, R. (1994). *Gender Development*, (小林芳郎・瀧野揚三訳, 1997. 『ジェンダーの発達心理学』, 田研出版) .
- Green, R., et al., 1986, “Lesbian mothers and their children: a comparison with solo parent heterosexual mothers and their children,” *Archives of Sexual Behavior*, 15:167-184.
- 日高康晴 (2004). 『ゲイ・バイセクシュアル男性のHIV感染予防行動と心理・社会的要因に関する研究 研究報告書』, 京都大学大学院医学研究科.
- 堀江有里 (2005). 「<レズビアン・アイデンティティ>という契機—その公共空間への介入可能性—」 仲正昌樹編 『叢書アレティア6 ポスト近代の公共空間』, 御茶の水書房, 143-176.
- 家永登 (2004). 「生殖革命と揺らぐ親子関係」, 清水浩昭・森謙二・岩上真珠・山田昌弘編 『家族革命』, 弘文堂, 221-237.
- 岩上真珠 (2003). 『家族—ライフコースとジェンダーで読む—』, 有斐閣.
- Jordan, K.M., & Deluty, R., H. (1998). “Coming out for lesbian women: Its relation to anxiety, positive affectivity, self-esteem and social support,” *Journal of Homosexuality*, 35 (2) :41-63.
- Jordan, K.M., & Deluty, R., H. (2000). “Social support, coming out, and relationship satisfaction in lesbian couples,” *Journal of Lesbian Studies*, 4 (1) :145-164.
- 釜野さおり (2004). 「レズビアンカップルとゲイカップル—社会環境による日常生活の相違—」, 善積京子編, 『スウェーデンの家族とパートナー関係』, 青木書店.
- 河口和也 (1999). 「セクシュアリティの『応用問題』」, 『現代思想』, 27 (1), 青土社, 210-215.
- 河口和也 (2003). 『クィア・スタディーズ』, 岩波書店.
- 血縁と婚姻を越えた関係に関する政策提言研究会 < <http://www.geocities.jp/seisakukenjp/> > accessed Dec.26 2006.
- 金城清子 (1998). 『生命誕生をめぐるバイオエシックス—生命倫理と法』, 日本評論社.
- Lewis, K.G. (1980). “Children of lesbians: Their point of view,” *Social Work*, 25:198-203.
- Link, B. (1987). “Understanding labeling effects in the area of mental disorders: An assessment of the effects of expectation of rejection,” *American Sociology Review*, 52:96-112.
- Linsay, J., Perlesz, A., Brown, R., McNair, R., de Vaus, D., & Pitts, M. (in press) “Stigma or respect: Lesbian-parented families negotiating school setting,” *Sociology*.
- Lynch, J.M., & Murry, K. (2000). “For the love of the children: The coming out process for lesbian and gay parents and stepparents,” *Journal of Homosexuality*, 39 (1) :1-24.
- 松原洋子 (2003). 「生殖技術と『公共の利益』のポリティクス」, 竹村和子編 『“ポスト”フェミニズム』, 作品社.
- Morris, J., Waldo, C., & Rothblum, E. (2001). “A model of predictors and outcomes of outness among lesbian and bisexual women,” *American Journal of Orthopsychiatry*, 71 (1) :61-71.
- 泪谷のぞみ (2003). 「レズビアン・マザー素描」, 『女性学年報』, 24:132-143.
- Perlesz, A., Brown R., & McNair R. (2006). “Lesbian family disclosure : Authenticity and safety within private and public domains,” *Lesbian & Gay Psychology Review*, 7 (1), 54-65.
- Perlesz, A., Brown, R., Linsay, J., McNair, R., de Vaus, D., & Pitts, M. (in press). “Family in transition Parents, children and grandparents in lesbian families give meaning to ‘doing family’,” *Journal of Family Therapy*.
- Rosario, M., Hunter, J., Maguen, S., Gwada, M., & Smith, R. (2001). “The coming out process and its adaptational and health-related associations among gay, lesbian, and bisexual youths: Stipulation and exploration model,” *American Journal of Community Psychology*, 29 (1) :133-161.
- 齋藤有紀子 (2001). 「生殖補助医療技術の議論から見えること—生殖機能の拡大を保障される人と、放棄を求められ

- る人』『助産婦雑誌』,55 (4) :6-7.
- Schaffer,R. (1990).*Making Decisions about Children*, (無藤隆・佐藤恵理子訳,2001.『子どもの養育に心理学がいえ
ること』,新曜社) .
- Stacey,J., & Biblarz,T.J. (2001).“(How) does the sexual orientation of parents matter?” *American Sociological
Review*, 66:159-183.
- Van Dam, M.A. (2006-a). “*Lesbian Family Disclosure: A Geopolitical Perspective*”, in Workshop Block 3 at
International Conference on LGBT Human Rights, 28 July Montreal.
- Van Dam, M.A. (2006-b). “A Lesbian Identity Disclosure Assessment: ALIDA Instrument ,” *Journal of
Homosexuality* (in press).
- Van Dam, M.A. (2004). “Mothers in Two Types of Lesbian Families: Stigma Experiences, Supports, and
Burdens,” *Journal of Family Nursing*, 10 (4) :450-484.
- Van Dam, M.A. (2003). “Bronfenbrenner’s Ecological Theory and Lesbian Families,” *Clinical Excellence for
Nurse Practitioners*, 7 (4) :99-105.
- Van Dam, M.A. (2001). “Lesbian Disclosure to Health Care Providers and Delay of Care,” *Journal of the Gay
and Lesbian Medical Association*,5 (1) :11-19.
- ヴァインセント,キース (1997).「クローゼットの空間とカミングアウトの実践」『ゲイ・スタディーズ』,青土社,90-123.
- Westbrook,L.E.,Bauman,L.J., & Shinnar,S. (1992). “Applying stigma theory to epilepsy: An assessment of the
effects of expectation of rejection,” *American Sociological Review*, 17:633-649.
- Wright,J.M., (1998). *Lesbian step families: An ethonology of love*, Harrington Park Press.
- 山根常男・玉井美知子・石川雅信編 (2006).『テキストブック家族関係学—家族と人間性—』,ミネルヴァ書房

【注】

- 1 Lesbian-familyとは、Lesbian-motherとその子どもから成る家族を指す。Lesbian-motherとは、性的指向が同性に向かう、ひとりまたは女性同士で子育てをする女性のことを指す。本論では、英語圏の女性を対象とした研究を取り上げるので、日本との文化的背景の違いなどを銘記するために、あえて英語表記とする。「Lesbian Motherhood」についての翻訳辞典における説明文としては以下のものがある。
「レズビアンであって、かつ異性愛結婚によってであれ、養子縁組や人工授精によってであれ、婚姻外での異性愛性交によってであれ、母親となった女性。これらの女性は、しばしば子の後見を法的に拒否され、人工授精の治療サービスを受けることが困難で、養親たる資格も剥奪される。フェミニズム運動は、レズビアンの母親の権利についての支持を強めている」(Boles,J.K. & Hoeverler,D.L.,1996. *Historical Dictionary of Feminism*, 水田珠枝, 安川悦子監訳.2000 『フェミニズム歴史事典』明石書店.) LGBTとは、Lesbian/Gay/Bi-sexual/Transgenderの略である。最近では、さらに、Intersex と Queer=Questionを加えて、LGBTIQと表記されることもあるが、煩雑になるので、本稿では簡略に記す。また、LGBTと一口に言っても、ジェンダー等の問題がありひとしなみには扱えない。本稿は、自伝を除いて、基本的にLesbian-familyに焦点をあてて考察する。
- 2 APA (American Psychological Association) が、Amicus Brief (被告のために法廷助言者が裁判所に提出する意見陳述書) を、以下の裁判において提出している。
APA公式サイトより。<<http://www.apa.org/pi/lgbcpolicy/amicusbriefs.html>>accessed 06 Jan. 2007. 例えば、Arkansas Department of Human Services v. Howard (2005),In Re. Adoption of Luke (2001),Boswell v. Boswell (1998),DeLong v. DeLong (1998),Hertzler v. Hertzler (1994)
Bottoms v. Bottoms (1993) など。例えば、DeLong v. DeLong (Case No. 80637 [Sup. Ct. Mo. 1998]) では、Lesbian-mother側の訪問制限の緩和を勝ち取っている。Lesbian-motherが関わる親権紛争については、有田 (2006-b) を参照されたい。
- 3 血縁と婚姻を越えた関係に関する政策提言研究会の当事者アンケート調査 (2003年) のなかに、LGBT当事者の生殖・子育てに関する質問が含まれている。なお、この調査結果をアンケート実施者の承諾の上さらに整理・分析したものが、有田・藤井・堀江 (2006) である。
- 4 The Oxford English dictionary 2nd ed.,1989. prepared by Simpson,J.A. and Weiner,E.S.C.,Clarendon Press,においても、“come out”については、“To acknowledge publicly one’s homosexuality” (自らのホモセクシュアリティを公に明らかにすること) と記載されている。「カミングアウト」という語は日本でも定着し、公的・私的場面を問わずに幅広い意味で使用されている。また、第3章で見るように「カミングアウト」をめぐる学問的思索も深められている。
- 5 Van Dam (2004:451-452) より筆者が要約した。

- 6 例えば、入院中のLesbianが親や親族と不仲になっている場合（ホモフォビアのために、このような例は少なくない）、極力会わせないう工夫し、パートナーを重要なサポーターとして尊重するということが、治療をすすめる上で重要となる場合がある。
- 7 具体的には、自らの性的アイデンティティが理由で仕事を喪失した経験があったとしたのは、タイプ①7.5%、タイプ②18.2%（例えば、5人がアメリカ軍兵士の職を失ったと報告している）。カミングアウトした後、友人を失ったのは、タイプ①43.5%、タイプ②40.5%、からかいやハラスメントを受けたことがあるのは、タイプ①80.3%、タイプ②76.0%であった。
- 8 その他の差異として、以下がある。
- 子どもの親権。両方の母親が保持しているのは、タイプ①80家族（66.7%）、タイプ②3家族（5.0%）、片方のみは、タイプ①40家族（33.3%）、タイプ②は57家族（95.0%）（ $p=.000^{**}$ ）。
- 世帯としての年収。\$60,000以下が、タイプ①は24家族（21.7%）、タイプ②は、28家族（46.7%）、\$60,000以上が、タイプ①は96家族（80.0%）、タイプ②は32家族（53.3%）（ $p=.001^{**}$ ）。
- 子どもの年齢についても、違いがある。タイプ①では、0-3才が55家族（45.8%）、4-6才が65家族（54.2%）、17-20才が、2家族（1.7%）、20以上が0家族、タイプ②では、0-3才が7家族（1.7%）、4-6才が、8家族（11%）、17-20才が、16家族（26.7%）、20以上が、13家族（21.7%）（ $p=.000^{**}$ ）
- Lesbianアイデンティティのために、仕事を失ったか、について、タイプ①は19人（7.5%）、タイプ②は21人（18.2%）（ $p=.002^{**}$ ）。友人関係を制限しているか、について、タイプ①は12人（5.0%）、タイプ②は、15人（12.4%）（ $p=.013^{*}$ ）。
- Lesbianアイデンティティのために、「あなたは精神疾患がある」と言われたことがあるか、についてタイプ①は176人（73.2%）、タイプ②は、68人（57.0%）（ $P=.003^{**}$ ）であった。
- 現在のパートナーとの暮らしは、タイプ①は平均12年、タイプ②は6年であった。
- 9 Stacey & Biblarz (2001) は、まさにこの問題に着目するという点で先鞭をつけた論文の一つである。筆者も同様の立場であるが、Van Dam等、本稿で扱う諸研究を参照することによって、より具体的に比較研究の問題点を指摘することができることを示したい。
- 10 この調査は、比較的未開拓な分野である、Lesbian-familyの、公的な世界と私的な世界との、接触場面に焦点をあてたもので、ヴィクトリアにおける、Lesbianを親とする家族についての、より包括的なインタビュー調査の一部分である。全体的な調査結果については、別稿（Lindsay et al, in press; Perletsz et al., in press）に譲るとしている。
- 11 De novoとは、ラテン語で「初めから」という意味で、ヘテロセクシュアルな関係を経由せずに、初めからLesbianである二人がカップルで子どもを得た家族を指す言葉としての調査者らによる造語である。
- この10家族のうち、6家族の子どもはknown donor（名の知られたドナー）、3家族の子どもはunknown donor（匿名ドナー）によって、産まれている。また、1家族は、人工授精による子どもと、かつての異性関係で産まれた子どもの双方を育てている。
- 12 一方、「ステップファミリー」の子どもペニー（14才）は、学校では親しい友だちのみに開示しているという。ペニーは、プライベートな生活においては、母親の恋人ロビンを、彼女の家族として受け入れ、自分の保護者とも考えているが、学校や地域では、ロビンを家族の「友人」と呼んでいる。家族の形態を説明せねばならない折には、短縮した名前ロブと呼ぶことにしているという。そうすれば、男性のように聞こえるからである[Perlesz2006:58]。
- 13 自己評価の測定尺度について：
- Harter Self Perception Profile for Adolescents (Herter1982) を使用して、7項目のサブスケールについて測定した。7項目とは、社会的受容・自己有能感・品行・身体的容姿・親密な友人・学業成績・運動能力である。
- 感知されたスティグマの測定尺度について：
- 10項目、6ポイントで測定した。Link (1987) の、リケルトタイプスケール (Likert-type scale) の6ポイントで測定した。すなわち、いいえの0点から、はいの6点までを点数化した。質問例は、「ある子どもの母親がlesbianであるとき、他の子どもたちは、その子どもと、よろこんで友だちになると思いますか？」など。
- 対処する能力の測定尺度について：
- 3つのサブスケールを、Wills Coping Inventory (1986) から採用した。
- 3つのサブスケールとは、決断能力・認識的対処能力・社会的サポートである。
- 質問項目は、21項目、5ポイントのリケルトタイプスケールで測定した。
- 開示の測定尺度について：
- 開示についての測定は、この調査のために特別にデザインした。質問例は、「あなたの人生に含まれる次の人々のうち、だれに、あなたのお母さんの性的指向を話しましたか？」など。カテゴリーは次の6つ。親友、学校のともだち、学外の友だち、親しくはないけれどクラスメート、教師、ボーイフレンドまたはガールフレンドである。それぞれのカテゴリーにおいて、「全員に話した」か、「数人だけ」か、「全く話していない」で答える。
- 14 Garnerは、物心がつくとともに、自分の家族が世間では論争のテーマになっていることに気づくに至り、まさにその家族のなかで育っている自分自身が、「正常な子ども」として成長しているのかどうか、常に観察され値踏みされ、まるで「動物園の檻の中にいる人

間」であるかのように感じたという。たしかに、100を超えるLesbian-family研究において子どもたちがサンプルとして調査対象となってきた。

15 COALGEとは、“Children of Lesbian and Gays Everywher”の略称。

1979年、Gayの父親たちがFamily Pride Coalitionを結成した。当事者団体としては、アメリカ最大のものの一つである。1999年、COLAGEは、この団体から、LGBTを親に持つ子どもを主体とした組織として独立した。

<<http://www.colage.org/>> accessed Jan. 07 2007.

The Reaffirmation of the Stigmatized Family: the Examination of Comparative Studies about English-Speaking Lesbian-families in Countries

ARITA Keiko

Abstract:

The purpose of this paper is to point out that lesbian-families are not homogeneous. Arita(2006)* surveyed the research in developmental psychology about lesbian-mothers and their children in the U.S. and Europe. As a whole, this research holds the premise that lesbian-families are homogeneous. However, recent research indicates that this premise does not match reality. The research of Mary Ann van Dam, Rhonda Brown et.al, reveals that lesbian-mothers who have had babies as lesbians by design disclose their sexuality to society more than lesbian-mothers with children from a previous heterosexual marriage. This research indicates that although lesbian-mothers who are open about their sexuality may receive social criticism, they also have the ability to create stronger support networks. T.Gershon, et.al, focuses on the relationship between feelings of self-esteem and stigma in the children of lesbian-mothers. The research shows that children who disclose more about their mothers sexuality tend to have higher self-esteem even if they perceive a social stigma. Finally, the writing of A.Garner, who is a child of gay-fathers, shows the complexities that arise when straight children tell the outside world that their parents are gay. This suggests that not only the families of lesbians but those of gays as well are heterogeneous.

*Arita,K.2006 "Beyond limitation in the legal definition of 'parent' : what lesbian-mothers assert in legal courts in America,"Core Ethics,vol.2,209-224.

Key words : Lesbian mother, Gay father, Disclosure, Coming out, Reproduction of LGBTIQ